

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



9

よろこびの知らせ
第9集

目 次

Go In Peace!	1
ルカ 8:43-48	
ベテスダの池で	10
ヨハネ 5:1-9	
シロアムの池に	19
ヨハネ 9:1-7	
幸いへの道	28
ルカ 6:20-26	

ここに収められたメッセージは、2020年6~7月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

Go In Peace!

ルカ 8:43-48

8:43 ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、

8:44 イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。

8:45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか。」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。この大ぜいの人が、ひしめき合って押しているのです。」と言った。

8:46 しかし、イエスは、「だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから。」と言われた。

8:47 女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第とを話した。

8:48 そこで、イエスは彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」

一、救いの対象

この箇所は、イエスのガリラヤでの宣教の一場面ですが、ここから、イエスがどのような人を、どのような時に、どのようにして救ってくださるのかを学びましょう。

最初にイエスがどのような人を救ってくださるのかを学びます。ここには12年間も病気に苦しめられてきたひとりの女性がイエスによって癒やされたことが書かれています。けれども、彼女はこんにちまで「長血の女」と呼ばれるだけで、名前は知られていません。彼女ばかりでなく、大勢の人がイエスの特別な力を体験し、また、立派な信仰を言い表していますが、聖書はその人たちの

名前を残していません。

ルカ5章に、全身をツァラートに冒された人のことが書かれています。この人は「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます」（ルカ5:12）と言って、イエスを信じました。「信仰とは神がお出来になると認めることではなく、それをしてくださると信じることである」

“Faith is not believing that God can. It is knowing that God will.”という言葉がありますが、この人は、イエスが「できる」というだけでなく「してくださる」と信じたのです。素晴らしい信仰を持った人でしたが、この人の名前は残されていません。

ルカ7章には、ある百人隊長が自分のしもべのためにイエスに癒やしを願ったことが書かれています。人々はこの百人隊長について「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。この人は、私たちの国民を愛し私たちのために会堂を建ててくれた人です」（ルカ7:4-5）と言いました。けれども彼は、使いの人を通してイエスにこう伝えました。「主よ。わざわざおいでくださいませんように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。…ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。」（ルカ7:6-7）これを聞いたイエスは「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません」（ルカ7:9）と言って彼の信仰を誉めました。けれども、この人の名前も聖書に

書かれていません。

なぜでしょう。それは、福音書がイエスの御名を知らせ、あがめるために書かれたからで、私たちにとって大切な名はイエスの御名の他にないからだと思います。しかし、それと同時に、このことは、イエスが、「名も無き者」たちに心をかけ、そうした人々に手を差し伸ばしてくださることを伝えているのだと思います。

有名であるか無名であるかは救いに何の関係もありません。この世で、人々の間で、どんなにその名が知られていても、天で、神に知られていなければ、その人の人生には何の意味もありません。イエスは弟子たちに言いました。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

(ルカ 10:20) あなたは、どちらを願いますか。あなたの名が、地上で、人々に知られることでしょうか。それとも、天で、神に覚えられることでしょうか。地上でその名が知られても、それはほんのわずかな期間だけで、やがて忘れられていきます。しかし、イエスの御名を信じる人の名は、天で、永遠に覚えられるのです。名もない者にさえ、心をとめ、その名を天に記してくださるイエスの恵みに感謝しましょう。

二、救いの時

次に、イエスがどのような時に人を救ってくださるの

かを学びましょう。この女性の癒やしは、イエスが、死にかけている会堂司ヤイロの娘を助けるために道を急いでいる時に行われました。イエスの回りには、いつものように大勢の人々が群がっていて、イエスの進む道をふさいでいました。ヤイロはイエスの前に立って、「娘が死にそうなのです。道をあけてください」と、必死になって叫んでいたことでしょうか。ところが、イエスは、その途中で足を止め、「わたしにさわったのは、だれですか」と言って、群衆を見回しました。誰も名乗りでませんでした。それでもイエスは黙って、人々を見回しました。しばらくの間沈黙の時が続きました。癒やされた女性は、そつとそこを去るつもりでしたが、隠しきれないと知って、震えながらイエスの足もとにひれ伏して、自分がイエスにさわったわけと、その時、即座に病気が癒やされたことを話しました。これを聞いていた会堂司ヤイロはどう思ったのでしょうか。きっと、「イエスさまどうしてこんなところで時間を使っているのですか。急いで、私の娘を助けてください」という気持ちになったことでしょうか。この女性に対しても、「あとで治してもらえばよいのだ」とさえ思ったかもしれませんが、それも無理もないことだと思います。その女性が去った時、ヤイロは娘が亡くなったという知らせを聞きました。

「ああ、間に合わなかったか。いまさら、イエスさまに来ていただいても、もう遅すぎる。どうしてイエスは急いでくださらなかったのだろう」と思ったことでしょうか。私たちも、問題がなかなか解決しなかったり、祈りが聞

かれなかつたりすると、「イエスさま。どうして、早くしてくださらないのですか」と言いたくなることがあります。ですから、ヤイロの気持ちはよく理解できます。

詩篇 70-71 篇には「神よ。私を救い出してください。主よ。急いで私を助けてください。…神よ。私のところに急いでください。あなたは私の助け、私を救う方。主よ遅れないでください。…わが神よ。急いで私を助けてください」（詩篇 70:1, 5、71:12）という祈りがあります。同様の祈りは詩篇 22:19、38:22、40:13、そして 141:1 にもあります。どれも、神に「急いでください。早くしてください」と祈っていますが、それは受けている苦しみがあまりにも大きく、切羽詰ったものだからです。そんな時は、そう祈ってよいのです。けれども、聖書には、それと同時に、時を神に委ね、神を待ち望むことも教えられています。「しかし、主よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。『あなたこそ私の神です。』私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください」（詩篇 31:14-15）という祈りもあるのです。

母親が子どもに一番よく使う言葉は「早くしなさい」だそうです。「早く起きて、早く顔を洗いなさい。早く服を着て、早くごはんを食べなさい。早く車に乗りなさい。学校に遅れますよ！」皆さんもそう言われて育ってきたかもしれません。それで、私たちは大人になっても「早く、早く」と人々をせかせ、自分をもせきたてて、余裕のない生活をするようになりました。そして、信仰

に関しても、「神を待ち望む」ことができなくなっているのです。神のなさることが遅いと感じる時も、神のなさることに間違いはないと信じて、神の時を待つ。そのことを習いたいと思います。ヤイロの娘は亡くなりました。しかし、イエスは娘を生き返らせることによってさらに大きな力を現し、ヤイロと彼の妻に大きな喜びを与えました。イエスがなさる救いは、「すべて時になんて美しい」（伝道者の書 3:11）のです。

三、救いの結果

最後にイエスが与えてくださる救いがどんなものなのかを学びましょう。イエスは、ひとりの女性のひたすら願いに答えて、彼女を癒やしましたが、彼女が群衆にまぎれ、そのまま家に帰るのを許しませんでした。イエスは、彼女を群衆の中から引き出し、ご自分の前に立たせました。けれども、それは彼女に恥ずかしい思いをさせるためではありませんでした。癒やしとともに、信仰と確信と、祝福を与えるためでした。もし、彼女がそのままイエスのもとから去ってしまったなら、「イエスの着物に触った時、たまたま病気が直っただけだったのだ」と勘違いし、この癒やしがイエスの力によるもの、イエスの愛とあわれみから出たものであることを確認しないままで終わったかもしれません。癒やしを得ても、癒やし主を持たなければ、それは救いではないのです。

ある時、外国で食糧援助をしている人から話を聞きました。その人はこう言いました。「私の目的は、食糧の足りない人に食べ物を運んであげることではありませ

ん。その人たちに田畑をたがやし、池を作って魚を養殖し、食糧を生産することを教えることです。」確かにその通りです。それが本当の「援助」でしょう。私はそれを聞いて、イエスの救いも同じだと思いました。イエスは、私たちを毎回毎回、それぞれの困難から救い出してくださいるだけでなく、私たちが人生で出会う困難や問題に出遭った時も、神に信頼し、希望と忍耐をもって、それを乗り越えていく力を与えてくださるのです。そのつどの救いや助けだけで終わらず、私たちを永遠に変わらない救いへと導き入れてくださるのです。病気を癒やされたこの女性についても、イエスは、彼女に、病気という問題だけではなく、人生のあらゆる問題への救いを与えてくださったのです。

イエスは、彼女に言いました。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」（ルカ 8:48）「娘よ」というのは「神の子ども」という意味です。彼女は、神の御子であるイエスを信じる信仰によって、ほんとうの意味で神の子どもとなり、神を父として信頼するようになりました。

「あなたの信仰があなたを直した」というのは、彼女の信仰を励ますための言葉です。彼女の信仰には足りないところもあったでしょう。しかし、イエスは小さな信仰の芽を摘むようなことをせず、私たちの足りない信仰をも「信仰」と認め、それがさらに真実で強い信仰に育っていくようにと励ましてくださるのです。

そして、「安心して行きなさい」と言って、彼女を家

に帰しました。「平安のうちに行きなさい。」私は、ある教会の集まりで頭に手を置いてもらって、そう祈ってもらったことがありました。それは英語での集まりでしたので、その祈りは “Go in peace!” と、英語で唱えられました。私はその時、全身が熱くなり、ほんとうに平安で満たされました。それ以来、英語の “Go in peace!” のほうが、日本語の「平安のうちに行きなさい」よりも、しっくりと心に響くようになりました。

「平和」や「平安」はヘブライ語では「שָׁלוֹם」（シャローム）です。イスラエルでは、朝も、昼も、夜も、人と会ったときも、別れるときも、挨拶の言葉は「シャローム」ひとつで通用します。しかし、イエスがここで言われた「シャローム」という言葉は挨拶以上のものです。「シャローム」には、「完全」「繁栄」といった意味がありますので、それは、癒やされた彼女が、より健やかであるようにとの祝福の言葉でもあったのです。私たちの人生の「繁栄」は、神との「平和」なしにはありえません。神が彼女にその聖なるみ顔を向け、彼女もまた、まごころをもって神を仰ぎ見る、そのような生活を生きるようにとの祝福を、イエスは彼女に与え、彼女を送り出してくださったのです。嵐の中でも恐れのない生活、不安のない心。それは、この神との平和を得、神の祝福を受けることによってはじめて与えられるものです。イエスの救いは、私たちにこの「平和」「平安」を与えます。

「平安のうちに行きなさい。」 “Go in peace!” 私たち

は、この言葉を聞くために礼拝にやって来ました。聖霊が語ってくださるこの言葉を聞くことがないまま帰らないようにしたいと思います。「長血の女」は十二年の間、多くの医者を訪れましたが、「だれにも直してもらえ」（43節）ませんでした。イエスは言っています。

「わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。」（ヨハネ 14:27）私たちのたましいはもとより、私たちの心身をも癒やすのは、イエスのくださる平安です。この世が与える「気休め」では、私たちは癒やされません。満たされません。力を得ることはできません。イエスのもとでたましいと、心と、からだの疲れを癒やされ、イエスがくださる「平安」で満たされ、新しい週をはじめたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちは不安な時代に、恐れに満ちた世界に住んでいます。この時代に、この世界で、信仰と希望と愛をもって生きることができるようになるため、私たちに、主イエスが与える平安を与えてください。それによって、キリストの救いを証しすることができるようにしてください。ひとりひとりに「平安のうちにいきなさい」と語りかけ、新しい週を始めさせてください。主イエスの御名で祈ります。

ベテスダの池で

ヨハネ 5:1-9

5:1 その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。

5:2 さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。

5:3 その中に大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せていた。

5:4 [本節欠如]

5:5 そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。

5:6 イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」

5:7 病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」

5:8 イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」

5:9 すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。

イエスはガリラヤで宣教を始めました。それは病気の人をいやし、悪霊を追放し、死んだ人さえも生き返らせる力あるわざを伴ったものでした。イエスは、ユダヤの祭りのたびごとに神殿に上りましたので、エルサレムでも人々を癒やし、また、教えました。ここではイエスがエルサレムで行った癒やしと、そのことで起こった論争について学びます。

一、イエスの癒やし

この日、イエスは神殿を出て、ベテスダの池に向かいました。神殿を取り囲むエルサレムの城壁の近くには、ここ

かしこに人工の池がありました。エルサレムで使う水を貯めておくため、また、神殿にやって来る巡礼者が渴いた喉を潤し、手足を清めるために使われていました。ベテスダの池は、長い間、それがどこにあったか分からなかったのですが、神殿の北側の「羊の門」から200メートルほどのところにその遺跡が発見されています。ベテスダの池の周囲は回廊で取り囲まれていました。ベテスダの池の水は時々、かき回わされることがあったのですが、そのとき、真っ先に水に入った者は病気が直るという話が広まり、この回廊には多くの病気の人や身体の不自由な人たちが集まるようになりました。

イエスはその中のひとりの人に目を留めました。この人は38年間も病気で、たとえ、池の水がかき回わされても、自分の力では水に入ることができない状態になっていました。イエスはそれを知ったうえで、この人に「よくなりたいか」と声をかけました。

皆さんは、このイエスの呼びかけをどう思いますか。病人に「よくなりたいか」などときかなくても、「よくなりたか」にきまっているのではないか、と思いませんか。普通はそうです。しかし、人は、逆境にさらされると、最初のうちは、「このままではよくない」と、懸命に努力するのですが、そうした状態が長く続くと、「努力しても何も変わらない」というあきらめの気持ちが起こってきて、現状に呑まれてしまうことが多いのです。人間の心理というもののはじつに複雑で、自分でも気が付かない間に、逆境が居心地の良い場所になってしまうことがあるのです。ほん

とうは解決の道や、向上の機会があるのに、「この問題や困難を抱えているかぎり、私は何もできないのだ」と言って、問題や困難の中に座り込んでしまうことがあるのです。

いままでイエスに病気を癒やしてもらった人たちには、「よくなりたい」という願いがありました。神は人間をロボットのように造りませんでした。人間に意志を与えた神は、私たちが自分の意志で救い、助け、力を願い求めるのに答えて、働いてくださるのです。もし、私たちが願うことも、求めることもせず、また、神が提供してくださる恵みを受け入れることがなければ、それは私たちのものにはならないのです。

それでイエスは、あきらめの中に沈み込んでいたこの人の意志を呼び覚ますために「よくなりたいか」と呼びかけたのです。「よくなりたいか。」今までだれひとりこの人にそう語りかけた人はいませんでした。誰かが何かを語りかけたとしても、それは「大変ですね」「お大事に」といった言葉だったでしょう。「よくなりたいか」と呼びかけるからには、この人を癒やすことができ、回復させることができなくてはならないからです。イエスの「よくなりたいか」という言葉には、「よくしてあげよう」という意味がありました。そして、この言葉を聞いた人に「よくなりたい」という意志が働き、「よくしてください」という願いが生まれたのです。

イエスは今も、同じように私たちに語りかけてくださいます。日々の祈りの時に、週ごとの礼拝で。聖霊の直接の

語りかけを通して、他の人の言葉を通して。ある時は優しく、ある時は厳しく。何度も、くりかえし、語りかけてくださっています。私たちは、たんに聖書を「なるほど」と言って知性で理解するだけでも、他の人の証に感情を動かされるだけでもなく、このイエスの語りかけに、自分の意志を働かせて答え、イエスがくださる救い、助け、力を受け取りたいと思います。

二、イエスの論争

さて、イエスがこの人を癒やしたことから、論争が起きました。イエスがこの人を癒やしたのが、「安息日」だったからです。イエスは、この人に「起きて、床を取り上げて歩きなさい」と命じ、この人は床を取り上げて歩き出しました。するとユダヤの指導者たちがすぐに飛んできて、「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない」と言って、この人をとがめました。「起きて、床を取り上げて歩く」ことは、安息日に禁じられている「労働」だということです。彼らは、この人をとがめただけでなく、イエスを見つけ出し、イエスを非難しはじめました。

ユダヤの指導者たちは、安息日の戒めを正しく理解していませんでした。安息日は、神が人を労働の重荷から解放するために与えた恵みの日です。「働いてはいけない」という禁止事項に重点があるのではなく、自分も、まわりの人をも「休ませる」ことに重点があるのです。イエスに癒してもらった人は38年間、立つことも歩くこともできず、寝床に縛られていました。彼にとって病気

はどんな労働よりもつらいものでした。一日といえども彼は「安息」を体験しなかったのです。安息日にその束縛から解放したとってどこが悪いのでしょうか。いいえ、安息日こそ、心身の重荷から解放され、癒やされる日でなければならないのです。

ルカ 13:10-17 に、18 年間、腰が曲がって伸ばすことができなかつた女性をイエスが癒やしたことが書かれています。それは、安息日に、会堂で行われたので、会堂司が人々に「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです」と言い出しました。イエスはそれに反論してこう言いました。

「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからとってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」（ルカ 13:15-16）イエスは、安息日こそ、あわれみのわざがなされる日だと、教えています。

イエスが 38 年間床に伏したままの人を癒やしたのは「ベテスダ」の池でしたが、この「ベテスダ」という名前には「あわれみの家」という意味があります。イエスは、「あわれみの家」で、あわれみのわざを行うことによって、安息日が、じつに神のあわれみの日であることを人々に教えているのです。

私たちもイエスの復活の日、日曜日を守っています。しかし、この日を「教会に行かなければならない日」と

考えているとしたら、それは、大きな思い違いです。日曜日は「教会に行かなければならない」という戒律や重荷を背負い込む日ではありません。この日は、仕事や家事から解放されて「教会に行くことができる日」です。教会は、私たちの「ベテスダ」、あわれみの家です。私たちはここで一週間の心身の疲れを癒やされるのです。「喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。」（詩篇 100:2）「人々が私に、『さあ、主の家に行こう』と言ったとき、私は喜んだ。」（詩篇 122:1）そのような喜びをもって教会に集いたいと思います。

三、イエスの主張

この安息日論争は、イエスの殺害計画にまで発展しました。イエスが、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」（ヨハネ 5:17）と言った時、ユダヤの指導者たちは、イエスを殺そうとしました。それは「イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたから」（ヨハネ 5:18）でした。しかし、事実、イエスは「神と等しい」お方、「神の御子」でした。病人をたちどころに癒やしたことがそれを証明しているのに、彼らはそれを認めませんでした。彼らは「自分たちは神を信じている」と言いながら、神の御子を信じなかったのです。

「あなたは神を信じていますか」という質問に、おそらく、世界中の 90 パーセント以上の人たちが「神を信じている」と答えるでしょう。人は誰も、目に見える世界

の背後に目に見えない、人間以上の存在があることを直感的に知っています。それは、生まれつき人間に備わった能力と言ってもよいでしょう。人間の脳は生まれたときにはほとんど白紙の状態なのだそうです。その後の成長の過程で、さまざまな情報を蓄え、具体的なものからはじまって、だんだんと抽象的なものを理解できるようになると言われています。ところが、おとなが「神」を教えないのに、また「神」という概念がきわめて抽象的なものであるのに、ちいさな子どもでも「神」を理解できるのは、いや、小さな子どものほうが、体験的に「神」を知っているのは、とても不思議なことです。これは、人が神に造られ、神がその意識の中に造り主を思う思いを組み込んだからです。

しかし、人が神を知る知識は、罪のために混乱し、人類は、唯一のまことの神に替えて、自分勝手にさまざまな神々を作りだしてきました。異邦人は、偶像を作り、神を刻んだ像の中に閉じ込めました。ユダヤの人々は唯一の神への信仰を保っていましたが、神のおこころを正しく知ることができず、生ける神を「戒律」の中に閉じ込めるようになりました。そこで、神は、ご自分の御子を世に遣わし、御子を通して、ご自分を明らかに示されました。イエスが人々と共に歩んだように、神が人と共に生きて働いておられるお方であることを明らかにしたのです。私たちは、この御子によって罪が赦され、神の子どもとされ、救われ、さらに神を正しく知るのでした。

人は信仰によって救われますが、その「信仰」は決し

て、漠然としたもの、曖昧なものであってはならないのです。自分が信じているお方が誰なのかを知らないで、どうして救いを確信し、救いの中を歩むことができるでしょう。イエスは「信仰」を定義して、言いました。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ 17:3）永遠の命、つまり、救いはイエスを神の御子と信じることの中にあるのです。ヨハネ 3:16 は「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」と言って、漠然と何かを信じるのではなく、「御子を信じる者」に永遠の命があると言っています。同じことはヨハネ 20:31 にもあり、こう書かれています。「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」ヨハネ第一 5:5 は「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか」と宣言しています。神の御子を信じる信仰に、救いがあり、人生の勝利があるのです。

イエスの「癒やし」は「論争」となり、さらにユダヤ人との「衝突」となりました。こうした論争や衝突を、イエスは、避けようと思えば避けることができたでしょう。しかし、それを避けたなら、イエスが神の御子であることが明らかにならず、誰もイエスを神の御子と信じ

て救われることができなかつたのです。ユダヤの指導者たちは、「癒やし」を見て驚きもせず、それを行ったイエスとはいったいどのようなお方なのだろうと考えもしませんでした。かえってイエスを神を冒瀆する者と決めつけました。私たちもそれと同じ間違いを繰り返さないようにしましょう。イエスが、「癒やし」と「教え」を通して示してくださっていることを、素直な心で受け入れましょう。イエスはご自分が神の御子であることを示しています。この神の御子が私たちに「よくなりたいか。よくしてあげよう」と、救いと助けと力を提供してくださっているのです。このイエスのオファーに、私たちの意志をもって「そうしてください」と答えましょう。そこに私たちの救いと勝利があるのです。

(祈り)

父なる神さま、イエスは、ご自分を危険にさらしてまでも、癒やしを行い、ご自分が神の御子であることを明らかにされました。それは、私たちがイエスを神の御子と信じて救われるためでした。イエスが命がけで語り、なされたひとつひとつのことを正しく見聞きし、私たちに与えられた意志を働かせて受け入れることができるよう、助けてください。主イエスの御名で祈ります。

シロアムの池に

ヨハネ 9:1-7

9:1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。

9:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」

9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。

9:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。

9:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」

9:6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。

9:7 「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。

一、弟子たちの議論

目の見えない人でも仕事につくことができる現代と違って、イエスの時代には、目の不自由な人の多くは、ものごいをするしか生きる方法がありませんでした。エルサレムの神殿に通じる道にも、そうした人たちが大勢いました。イエスは、その中の、ひとりの、生まれつき目の見えない人の前に立ち止まり、弟子たちも同じようにこの人の前で足を止めました。この人が生まれつきの盲人であることを、弟子たちが知ったのは、おそらく、この人自身が、「私は生まれつき目のみえない不幸な者です。いくらのお金でも私にめぐんでください」と、

道ゆく人々に呼びかけていたからでしょう。

弟子たちは、「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したためか」という議論を始めました。ある弟子は「それは両親が罪を犯したためだ」と言い、別の弟子は「本人の罪のためだ」と言いました。他の弟子は、「人は生まれる前にどうやって罪を犯すのか」と言い出しました。しかし、このような議論は、この人を苦しめるだけでした。目の見えない人は、耳がとても敏感です。弟子たちがひそひそと話していたとしても、何を話しているかは、はっきりと聞こえたことでしょう。

「障がいとは、罪の報いであり、呪いだ。」この人は、そんな言葉を何度も何度も聞かされてきました。そして、聞かされるたびに、「私は神からも見放されているのか」という気持ちになったことでしょう。弟子たちが議論していたのは、この不幸な人を助けるためではなく、この人の不幸を題材にして宗教上の議論をするためだったのです。

世の中には、なんと多くの「議論のための議論」があることでしょう。現代は、みなぎ評論家になって、無責任なことを言うようになりました。ずっと以前は、自分の意見を発表するには、新聞や雑誌に「投書」するのが、ほぼ唯一の方法でした。決められた字数内に自分の意見をまとめて書かなければなりませんので、よく考えて書いたものです。しかし、インターネットの時代になり、思いつくままのことを「ツイート」することによって、まともな意見がかき消されるだけでなく、言葉の暴

力で人を死に追いやるようなことさえ起こるようになりました。そこには、他の人を人として尊重する心が欠けているのです。イエスは、「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得があらましよう」（マルコ 8:36）と言って、どの人の命も全世界よりも重いと教えています。また、使徒パウロは、「キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください」（ローマ 14:15）と訴えています。弟子たちは、弱い立場の人を思いやることをイエスの模範から学んでいたはずなのに、イエスの心を自分たちの心とはしていなかったのです。

二、イエスの答

弟子たちは議論しましたが、結論が出ないので、「先生に聞いてみよう」ということになり、「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」（2節）と質問しました。「両親が罪を犯した」と言う弟子たちも、「本人が罪を犯した」と言う弟子たちも、イエスが自分たちをサポートしてくれると思っていたことでしょう。しかし、イエスはどちらもサポートしませんでした。イエスの答えは弟子たちの議論とは全く別のものでした。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（3節）弟子たちは、この人の不幸の「原因」を、「過去」にさかのぼって問いましたが、イエスは、神がこの人にしようとしていることについて話しました。「過去」のことではなく「未

来」のことを、「原因」ではなく「目的」について語ったのです。

問題を解決するために原因を追求することは必要なことです。科学や技術の分野では特にそうです。何かの機械を作ったが、うまく動かないといった場合は、いったいどこが悪いのか、部品のひとつひとつを点検し、その原因を追求します。そして、悪いところを修理して、問題を解決します。社会のしくみでもそうです。株の値段がすごく変動して投資をしている人が損失をこうむると、なぜ、こうなったのかと調べて、誰かが株を操作しているからだと分かると、不正な操作ができないように法律を作ります。会社でも、部下がとんでもないことをして会社の信用をなくすことがないように、取締役が監督します。それにもかかわらず、問題がおこったなら、なぜそうしたことが起こったかを調べて、それをチェックする制度をつくります。

同じように、人生のさまざまな問題においても、原因を追求して解決しなければならないものが多いでしょう。しかし、すべてが原因を追求すれば解決できるとは限りません。誰か他の人から、いわれのないことで被害をこうむった時、原因を追求することだけによって問題を解決しようとしたらどうなるのでしょうか。自分に被害を与えた人物を憎み、「あんな人を信用するんじゃないかった」と後悔し、「結局、人生はうまく立ち回ったほうが得をするんだ」という結論に達するだけです。神への誠実も、人への愛も捨てた醜い人生が解決であると

いうことになってしまいます。このような場合は、「なぜそうなったか」ということではなく、「今、ここから、どうしなければならぬか」を考えなければ、解決は見えてこないのです。

岩橋武夫という人をご存知でしょうか。岩橋さんは1898（明治31）年、大阪市で生まれ、1954（昭和29）年、56歳で亡くなるまで、日本の盲人福祉のために大きな働きをしたクリスチャンです。岩橋さんは、東京の大学で学んでいるとき、網膜剥離のため失明しました。人生に絶望し、その年の大晦日に自殺を図りましたが、母親の「何でもよいから生きていておくれ。お前に死なれたら、私は生きがいがなくなる」という言葉によって、「どんなことがあっても私は生きていこう」と決意するようになりました。

盲学校で点字を習得し、点字で聖書を読むようになり、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです」との言葉に触れました。点字ですから、文字通り、指でこの言葉に触れたのです。そして、この言葉もまた岩橋さんのたましいに触れました。岩橋さんはこの言葉をきっかけにイエス・キリストを信じ、母親とともにバプテスマを受けました。岩橋さんは、自叙伝『光は闇より』に、「この聖句によって闇の問題が一切解決された」と、書いています。

岩橋さんはその後、関西学院（かんせいがくいん）で学び、さらにエジンバラ大学に留学しました。修士号を

得たのち英国の盲人福祉の実態を調査し、それを日本の盲人福祉のために生かしました。また、ヘレン・ケラーと交流があり、それがきっかけとなって「日本ライトハウス」を創設し、ヘレン・ケラーを日本に招き、彼女の伝記を書きました。神は、失明によって人生に絶望し、自殺を図った青年を、目の不自由な方々が教育を受け、社会で活躍するために、用いてくださったのです。

私たちは、肉眼は開いていても、イエスを信じるまでは内面の目は閉ざされていました。霊的に盲目で、聖書に示されている神の栄光も、愛も、見ることはできませんでした。神が分からなければ、自分のことも、本当には分かりません。自分が神に造られたかけがえのない存在であることも、そうした存在として生きるため、罪を赦され、光を受けなくてはならないことも分からないままでした。しかし、信仰によって霊の目が開かれました。岩橋さんの肉眼は再び見えるようにはなりませんでしたが、その霊の目は開かれ、神からの使命に生きる生涯を送りました。イエス・キリストを信じる者には、障がいや痛み、苦しみは、その人を閉じ込める「牢獄」ではなく、そこから新しい人生を歩みだす、解放の「扉」となるのです。

三、イエスの命令

さてイエスは、地面につばきをして泥を作り、その泥をこの人のまぶたに塗りました。普通なら、「何をするんだ。盲人だといって馬鹿にするのか」と言いたくなるころですが、この盲人は、イエスがなすがままに任せ

ました。なぜでしょう。「神のわざがこの人に現われるためです」との言葉を聞いて、自分の身に「神のわざ」がなされると信じたからです。目の見えないこの人には、自分に語りかけたのが誰なのかは分かりませんでした。が、「わたしは世の光である」（5節）という言葉も聞いて、自分に語りかけた人を信じたのです。そして、「行って、シロアムの池で洗いなさい」との言葉に従いました。全盲の彼がシロアムの池に行くのは大変なことだったでしょうが、彼は、語られた言葉に従うことによって、その信仰を表わしたのです。「信」という漢字は「イ」（にんべん）に「言」と書きます。信仰は、語られた言葉に信頼することから始まるのです。「信仰は聞くことから…、聞くことは、…みことばによる」（ローマ 10:17）とある通りです。この人は、語られた言葉によって、それを語った方を信じました。そして、シロアムの池で目を洗うと、なんと、すぐに目が見えるようになりました。ふつうは、目の機能が回復しても、ものがはっきり見えるまでは何日もかかるのですが、この人はすぐに目が見え、景色や家や人物を認識することができました。これは神のわざ、奇蹟です。私たちも、神の言葉に聞き、それに信頼し、従うなら、やがて、神の大きなわざを見ることができるようになるのです。

イエスの言葉、「わたしは世の光」というのは、天地創造の第一日の光を思い起こさせます。イエスはその「光」です。イエスがつばきをして作った「泥」は、創造の第六日目に、人が土のちりから造られたことを思い

起こさせます。「つばき」は口から出るものなので「言葉」を表します。世界は、言葉によって造られました。イエスは「ことば」として、父なる神、聖霊なる神とともに世界を創造しました。イエスは、この人の目を再創造して、完全な視力を与えました。この人の闇に光が照り、この人の世界は一変しました。この人にとって、それは世界が、もういちど新しく造られたのと同じでした。イエスがこの人にしたこと、命じたことは、イエスがまことの神であることを示すものでした。

しかし、なぜ「シロアムの池」なのでしょう。エルサレムには、この人が目を洗うことができる池は数多くありましたが、イエスは「シロアムの池」を指定しました。それは、「シロアム」という名前には「遣わされた者」という意味があり、「遣わされた者」とは、神から遣わされた救い主、イエスご自身を指していたからです。

イエスがこの盲人の目を開いたのは「仮庵の祭」の時と思われませんが、「仮庵の祭」の最終日には、祭司がシロアムの池から水を汲み、祭壇に注ぐという儀式が行われました。その儀式が行われた日、イエスは「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ 7:37-38）と人々に語りました。イエスは、ご自分の命を「十字架」という祭壇の上に注ぎ、それによって人の霊の渇きをいやす者となりました。

イエスがこの人を「シロアムの池」に行かせたのは、人は、イエス・キリストのもとに来てはじめて、目が開かれ、新しい人生を始めることができることを教えるためでした。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。…すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」イエスは「わたしのところに来なさい」と招き、聖書は「イエスのもとに行きなさい」と命じています。私たちも、ためらうことなく、イエス・キリストのもとに向かいましょう。そこで、光を受け、新しくされ、新しい出発をしましょう。

(祈り)

父なる神さま、イエス・キリストを私たちの救い主として遣わしてくださり感謝します。主イエスは私たちの「シロアム」、また「光」です。主イエスが私たちの内面の目に触れてくださり、霊の目が開かれ、私たちに与えられた人生の意味を知り、目的を見出すことができるようにしてください。あなたのみわざが、この身になされることを信じて、明日に向かって歩ませてください。主イエスのお名前です。

幸いへの道

ルカ 6:20-26

6:20 イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話しだされた。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものですから。

6:21 いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。いま泣いている者は幸いです。あなたがたは、いまに笑うようになりますから。

6:22 人の子のために、人々があなたがたを憎むとき、また、あなたがたを除名し、はずかしめ、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。

6:23 その日には、喜びなさい。おどりが上って喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいからです。彼らの先祖も、預言者たちをそのように扱ったのです。

6:24 しかし、富んでいるあなたがたは、哀れな者です。慰めを、すでに受けているからです。

6:25 いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。

6:26 みなの人にほめられるときは、あなたがたは哀れな者です。彼らの先祖は、にせ預言者たちをそのように扱ったからです。

一、少数者への約束

教会で使っているカリキュラム、Gospel Project では、6月は「癒やし主」としてのイエスを学びましたが、7月は「教師」としてのイエスを学び、8月は「奇蹟を行う方」としてのイエスを学びます。イエスの「癒やし」も「奇蹟」も大切なものです。しかし、イエスが最も力を注ぎ、時間をかけたのは「教えること」でした。しかもそ

れは、少数の弟子たちをじっくりと訓練することでした。イエスはもちろん、大勢の人々をも教えました。群衆の多くはやがてイエスから離れていきました。その人たちはほんとうの意味でイエスの「弟子」にはなっていないからです。

2019年、日本で、ラグビーのワールド・カップの試合が行われ、日本のチームはベスト8（準々決勝）まで進みました。それまで、ラグビーは、日本ではあまりポピュラーではなかったのですが、そのときには大勢の人がラグビーの「にわかファン」になりました。それと同じように、群衆は、当時、「人気者」になりつつあったイエスを追っかけていたのです。イエスは自分についてくる大勢の群衆を斥けはしませんでした。彼らをあわれんで、彼らのうちの病人を癒やし、空腹な者に食べ物を与えました。しかし、同時に、イエスは「ファン」として自分について来るのではなく、「弟子」となって従うことを求めました。

イエスのお心には、福音が全世界に宣べ伝えられ、世界中の多くの人が救われるようにという大きな計画がありました。そうであるなら、「できるだけ多くの人々を集めて…」と考えるのが普通かもしれませんが、イエスは少数の弟子たちを身近において、彼らを訓練し、彼らに世界宣教を委ねたのです。けれども、このことは、決して社会の法則に逆行するものではありません。じつは、今日、世界中に拠点を持っている企業はみな理念を共にする少数の人々から大きくなっていったものばかり

です。コンピュータの DELL、コンビニエンス・ストアの 7-Eleven、グロッサリーの Whole Foods など、みなテキサスから始まったもので、今では世界規模の企業になっていますが、どれもみな、始まりは小さなものでした。たとえ数はすくなくとも、人々が共通の理念でしっかりと結ばれていくとき、それは大きく発展するのです。今日の企業経営者は知らず知らずのうちに、イエスがしたことを真似ているのです。

ある人が、こんな計算をしました。もし、世界にたったひとりのクリスチャンしかいなかったとしても、もし、その人が一年間にひとりの人をキリストに導いたとしたら、次の年にはクリスチャンは二人になります。その二人がまたひとりづつをキリストに導いたら、その次の年には、クリスチャンは4人になります。このようにクリスチャンが増えていけば、34年するとクリスチャンの数は85億8千993万4千592人になり、国連が予想している2020年以降の世界人口とほぼ同じになります。これは単なる理論上のことかもしれませんが、それでも、数が少ないからといって、何もできないと考えてはいけないことを教えてください。

イエスは、「小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです」（ルカ 12:32）と言って、数の少なかった弟子たちを励ましました。イエスの復活の後、エルサレムに集まった弟子たちは120人にすぎませんでしたが、この120人が一日のうちに3,000人になり、し

ばらくすると、5,000人に増えました。そして、わずか40年、一世代の間に、教会はローマ帝国のあらゆる地域に広がったのです。イエスの励ましの言葉は聖霊の力を伴い、弟子たちの「小さな群れ」が世界宣教を成し遂げたのです。

二、弟子への招き

ところで「弟子」という言葉には「学ぶ者」という意味があります。しかし、「学ぶ者」といっても「学生」という意味ではありません。「学生」は「教授」が与える知識を受け取るだけで良いのかもしれませんが、「弟子」は「師匠」から、技能だけではなく、職業に対する姿勢や、そこにある精神をも学ぶのです。ドイツでは、半分は学校で学び、半分は「マイスター」と呼ばれる、親方のもとで修業をする「マイスター制度」が優秀な技術者を育てています。

このような師弟関係は、弟子が師と共に時を過ごす中で造られていきます。使徒4章に、ペテロとヨハネが、神殿で捕まえられ、ユダヤの最高法院の尋問を受けた時のことが書かれています。そのとき、ペテロもヨハネも、ひるむことなくイエスがキリストであることを証しました。ユダヤの指導者たちは、「ペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚」きました。最高法院にいる人々は、祭司の家柄であったり、当時の最高の教育を受けた者たちだったので、なぜ、無学なガリラヤの漁師たちが、こんなにも理路整然と大胆に語るができるのかを不思議に思っ

たのです。そして、彼らが気づいたことは、「ふたりがイエスとともにいた」ということでした（使徒 4:13）。

「イエスとともにいた。」ここにキリストの弟子となって学ぶ秘訣があります。イエスとの人格のまじわりの中で、イエスご自身から学ぶ。それによって人は本物の「弟子」となるのです。

しかし、今、イエスは天におられます。今日の私たちはどうやって「イエスとともにいる」ことができるのでしょうか。イエスは天に帰りましたが、それと入れ替わるようにして、聖霊が天から来てくださいました。イエスは、聖霊がご自分に代わる教師であると言いました。

「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」（ヨハネ 14:17）「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」（ヨハネ 16:1）聖霊が私たちのところに来て共にいてくださることは、私たちがイエスのところに行ってイエスと共にいることになるのです。聖霊が私たちの教師となってくださることは、イエスから直接学ぶことと同じなのです。

また、イエスは使徒たちに「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。…また、

わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守る
ように、彼らを教えなさい」（マタイ 28:19-20）と命じま
した。イエスが使徒たちに命じた「人々を弟子とし、彼
らを教える」務めは、教会に引き継がれています。漢字
で「教会」を「教える会」、あるいは「教わる会」と書
き表しますが、それは、教会が「人々がそこでキリスト
の弟子となるところ」ということをよく言い表していま
す。現代の私たちも、聖霊と教会によって、初代の弟子
たちと同じように、「イエスとともにいて」、イエスご
自身から学び、イエスの弟子となることができるので
す。

三、弟子への道

イエスの「弟子」になる。それには、それなりの覚悟
が必要ですが、それは、なにか悲壮な決意をしなければ
ならないということではありません。イエスの弟子になる
には、確かに、一步を踏み出す決心が必要です。しか
し、それは「罪」から「赦し」へ、「闇」から「光」へ
の「喜ばしい」一步なのです。イエスは「ひとりの罪人
が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こ
る」（ルカ 15:10）と言いました。イエスに出会ったザア
カイは「大喜びでイエスを迎え」（ルカ 19:6）ていま
す。エルサレムで始まった教会は、「毎日、心を一つに
して宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって
食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持た
れ」ていました（使徒 2:46-47）。使徒パウロの手紙には
30 回以上も「喜び」という言葉が使われています。初代

の教会には喜びが溢れていました。キリストの「弟子」になることは大きな「喜び」なのです。

ルカ 6:22 で、イエスは弟子たちを見つめて、「あなたがたは幸いだ」と言いました。そうです。「弟子の道は幸いの道」です。

「幸い」、「幸せ」、「幸福」といっても、人それぞれに考えがあり、それを測る基準も違っているでしょう。多くの方は、お金があって、美味しいものをいっぱい食べて、楽しく暮らして、人から誉められることが幸せだと言うでしょう。ところが、イエスは、24 節からのところで、「富んでいるあなたがたは、哀れな者です」「食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です」「いま笑っているあなたがたは、哀れな者です」「みなの人にほめられるときは、あなたがたは哀れな者です」と言っています。「えっ！」と思うような言葉です。逆に、「貧しい者は幸いです」「いま飢えている者は幸いです」「いま泣いている者は幸いです」「人々があなたがたを憎むとき…あなたがたは幸いです」とイエスは言いました。多くの方が考えていることと、逆のことを言っています。誰もが「どうして？」と思うでしょう。イエスがこのように言ったのは、本物の幸いは、その人のもって生まれた能力、家柄、境遇、あるいは、自分で得た財産や持ち物によるものではないことを教えるためでした。もし、そうしたもので人の幸・不幸が決まるのなら、「幸福な人」と「不幸な人」は生まれたときから決まっていて、能力や健康に恵まれなくて生まれた人、ま

た、良い境遇や人間関係の中に生まれなかった人は、一生涯「幸福」にはなれないということになります。

イエスが使った「幸い」という言葉は「祝福されている」という意味を持つ言葉です。イエスは人をほんとうに幸せにするのは神からの祝福であると言っています。そして、その祝福は、私たちの境遇や環境から来るものではなく、私たちの神への信頼を通して与えられるものなのです。イエスが「哀れだ」と言った言葉は、「わざわざ」「不幸だ」「忌まわしい」などと訳されているのですが、それは神の祝福のない虚しいものを指しています。たとえ、富んでいても、自分の財産に頼って神に頼らないなら、食べ飽きても、それによって神を忘れてしまうなら、おもしろおかしく生きていても、それが神から離れている不安をごまかすためであるなら、人々に誉められていい気になっていても、罪赦されて神に受け入れていただく恵みを知らなければ、それはいちばん不幸なことなのです。

しかし、キリストの弟子となって、キリストに頼り、キリストに従う人生は、たとえ貧しくても、飢え渴きを覚えることがあっても、悲しみに落とされることがあっても、また、人々から仲間はずれにされることがあっても、そうしたものによっては左右されない、信仰の富、たましいの満足、天の喜び、そして神の愛を持つ幸いな人生なのです。イエスが私たちに「弟子となれ」と言うのは、神のいない虚しい人生から救われ、神の祝福の中を歩くようにとの招きなのです。使徒パウロはこう言っ

ています。「私たちは…人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。」（コリント第二 6:8-10）「私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っていません。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」（ピリピ 4:12）パウロは、そう言うことによって、神からの幸いを証ししています。キリストの弟子として生きている者は皆、同じ証しを持っています。「弟子の道は幸いの道。」このことを信じて、一步を踏み出しましょう。

（祈り）

父なる神さま、私たちのこの集まりは、まことに「小さな群れ」ですが、主イエスは、そんな私たちに目を留め、「幸いだ」と宣言し、「恐れるな」と励ましてくださいます。あなたの祝福を受け、それを他の人々と分け合うことができるため、私たちがキリストの弟子とし、キリストに学び、キリストに従う者としてください。弟子として歩む者に約束された幸い、祝福、平安と喜びに生きる者としてください。主イエスのお名前です。

あとがき

聖書には神への愛とともに隣人への愛も教えられており、日本のキリスト者たちは、日本の社会福祉事業のさきがけとなりました。アメリカ、オハイオ州で始まった「基督教婦人矯風会」は世界平和・純潔・禁酒を目指して1886（明治19）年に日本にも誕生しました。この運動は、未成年禁酒法（1923年）や売春防止法（1956年）の制定を促進しました。イギリスで始まり、1895（明治28）年に日本に来た「救世軍」も、廃娼運動や禁酒運動をはじめとして、数々の社会事業を手がけました。救世軍の「社会鍋」は、日本では1919年に始まっています。

孤児たちのためには、1887（明治20）年、石井十次が「岡山孤児院」を、1890（明治23）年、小林勝之介が兵庫県に「博愛社」を建てています。また、留岡幸助はアメリカで刑務所制度を研究し、帰国後、1889（明治32）年、東京に「家庭学校」を建て、非行少年の教化と刑務所の改善のために尽くしました。

賀川豊彦は1909（明治42）年、神戸のスラム街に住み、そこで伝道を始めました。賀川は1921（大正10）年、神戸造船所争議で、労働運動を指揮し、投獄されたこともありましたが、終始、平和を唱え、社会的弱者の側に立ちました。そのため、太平洋戦争の前年、1940年に憲兵隊によって身柄を拘束されました。

このように、キリスト者は、日本では少数者であり、様々な偏見と圧迫があつたにもかかわらず、遅れていた日本の社会福祉のために尽くしました。大正期に社会福祉に功績のあつた人々が表彰されることがありましたが、その70パーセントがキリスト者でした。



Penguin Club

www.penguinclub.net